

# 任意の原始再帰関数をどこかの $g_n$ で支配できる 原始再帰関数列 $\{g_n\}_{n \in \omega}$ の構成とその証明 in PRA

橋本 航気

2022 年 10 月 28 日

## 概要

一階算術の  $\text{I}\Sigma_1$  より少し弱い体系 PRA (Primitive Recursive Arithmetic) でタイトルの定理を示すためには  $\Delta_0$  帰納法でうまくやりくりしなくてはならない. この”うまくやりくり”の部分は 3 節にまとめた. 2 節の証明はメタのそれとまったく同じである.

## 目次

1	一階算術の形式的体系 PRA の定義	1
2	タイトルのやつ	1
3	直感的に明らかだけどちゃんとした証明は大変なやつの証明	3

## 1 一階算術の形式的体系 PRA の定義

書くのがめんどくさいので Simpson [2] IX.3 節を見て下さい. 形式的体系に興味がない人は PRA $\vdash$  をメタだと思ってもらってもよいです.

## 2 タイトルのやつ

**定理 2.1.** 任意の原始再帰関数 (記号)  $f$  に対して, 次を満たす  $n \in \omega$  が存在するような原始再帰関数列  $\{g_n\}_{n \in \omega}$  が存在する<sup>\*1</sup>.

$$\text{PRA} \vdash f(x_1, \dots, x_k) < g_n(\max\{x_1, \dots, x_k\})$$

**証明.** 所望の  $\{g_n\}_{n \in \omega}$  は以下のように再帰的に構成される. まず  $g_0(x) = x + 1$  とする.  $g_n$  が与

---

<sup>\*1</sup> 便宜上  $k = 0$  なら  $\max\{x_1, \dots, x_k\} = 0$

えられているとして、 $g_n$  をイテレートする原始再帰的関数  $I_n$  が次のよう定まる。

$$\begin{aligned} I_n(x, 0) &= x \\ I_n(x, y+1) &= g_n(I(x, y)) \end{aligned}$$

$\omega$  上で考えると  $I_n(x, y) = \underbrace{(g \circ \cdots \circ g \circ g)}_{y \text{ 個}}(x)$  であるので、この直感に沿って  $I_n(x, y) = g^y(x)$  と表記しよう。そして  $g_{n+1}$  を  $g_{n+1}(x) := g_n^{x+2}(x)$  と定める。以上で構成される列  $\{g_n\}_{n \in \omega}$  が原始再帰的関数の列になっていることは定義から明らか。  $\{g_n\}_{n \in \omega}$  に関する基本的な性質として次が成り立つ（証明は 3 節に書いた）。

1. 任意の  $n$  について  $\text{PRA} \vdash \forall x, y (x < y \rightarrow g_n(x) < g_n(y))$
2.  $n < m$  ならば  $\text{PRA} \vdash \forall x (g_n(x) < g_m(x))$

主定理は原始再帰的関数の構成に関する帰納法で示す。

ゼロ関数・後者関数・射影関数

$$\begin{aligned} Z(x) &= 0 < g_0(0) \\ S(x) &= g_0(x) < g_1(x) \\ P_i^k(x_1, \dots, x_k) &= x_i \leq \max\{x_1, \dots, x_k\} < g_0(\max\{x_1, \dots, x_k\}) \end{aligned}$$

この証明中だけの略記として  $\text{PRA} \vdash f(x_1, \dots, x_k) < g_n(\max\{x_1, \dots, x_k\})$  を端的に  $f < g_n$  と書く。

合成

$m$  個の  $k$  変数関数  $f_1, \dots, f_m$  と  $m$  変数関数  $h$  について、ある  $n_1, \dots, n_m, n_h$  で

$$f_1 < g_{n_1}, f_2 < g_{n_2}, \dots, f_m < g_{n_m}, h < g_{n_h}$$

となっていたとする。このとき  $n := \max\{n_1, \dots, n_m, n_h\}$  をとれば

$$f_1, \dots, f_m, h < g_n$$

となっている。任意に  $x_1, \dots, x_k$  をとる。いま各  $1 \leq i \leq m$  について

$$f_{n_i}(x_1, \dots, x_k) < g_n(\max\{x_1, \dots, x_k\})$$

であるので、

$$\max\{f_1(x_1, \dots, x_k), \dots, f_m(x_1, \dots, x_k)\} < g_n(\max\{x_1, \dots, x_k\})$$

となる。したがって

$$\begin{aligned} h(f_1(x_1, \dots, x_k), \dots, f_m(x_1, \dots, x_k)) &< g_n(\max\{f_1(x_1, \dots, x_k), \dots, f_m(x_1, \dots, x_k)\}) \\ &< g_n(g_n(\max\{x_1, \dots, x_k\})) && (\because g_n \text{ の単調性}) \\ &\leq g_{n+1}(\max\{x_1, \dots, x_k\}) \end{aligned}$$

### 原始再帰

$k$  変数関数  $f_0$  と  $k+2$  変数関数  $h$  について  $f_0, h < g_n$  だったとする。このとき

$$\begin{aligned} f(x_1, \dots, x_k, 0) &= f_0(x_1, \dots, x_k) \\ f(x_1, \dots, x_k, y+1) &= h(x_1, \dots, x_k, y, f(x_1, \dots, x_k, y)) \end{aligned}$$

で定まる  $f$  について  $f < g_{n+1}$  であることを示す。  $x_1, \dots, x_k$  を固定し、  $y$  に関する帰納法で以下を示す。

$$f(x_1, \dots, x_k, y) < g_n^{y+1}(\max\{x_1, \dots, x_k, y\})$$

$y = 0$  なら自明。

$$\begin{aligned} f(x_1, \dots, x_k, y+1) &= h(x_1, \dots, x_k, y, f(x_1, \dots, x_k, y)) \\ &< g_n(\max\{x_1, \dots, x_k, y, f(x_1, \dots, x_k, y)\}) \\ &\leq g_n(\max\{x_1, \dots, x_k, y, g_n^{y+1}(\max\{x_1, \dots, x_k, y\})\}) \quad (\because \text{帰納法の仮定と } g_n \text{ の単調性}) \\ &\leq g_n(g_n^{y+1}(\max\{x_1, \dots, x_k, y\})) \quad (\because x_1, \dots, x_k, y < g_n^{y+1}(\max\{x_1, \dots, x_k, y\})) \\ &= g_n^{y+2}(\max\{x_1, \dots, x_k, y\}) \end{aligned}$$

したがって任意の  $x_1, \dots, x_k, y$  について

$$f(x_1, \dots, x_k, y) < g_n^{y+1}(\max\{x_1, \dots, x_k, y\}) < g_{n+1}(\max\{x_1, \dots, x_k, y\})$$

□

## 3 直感的に明らかだけどちゃんとした証明は大変なやつの証明

証明。次の (a)&(b)&(c) がすべての  $m \in \omega$  で成り立つことを  $m$  に関する帰納法で示す。

$$(a) \text{ PRA} \vdash \forall x, y [x < y \rightarrow g_m(x) < g_m(y)]$$

$$(b) \text{ PRA} \vdash \forall x, y [x < g_m^{y+1}(x)]$$

$$(c) \text{ PRA} \vdash \forall x (g_m(x) < g_{m+1}(x))$$

以降 (b) $m$  と書いて、「 $m$  に関する (b)」を表す。また、単に帰納法の仮定といった場合、最も入れ子が浅い帰納法の仮定を指すと約束しておく。

まず (a)0, (b)0, (c)0 が成立することを見る。(a)0 は自明。

(b)0 は  $x$  を固定し、  $y$  に関する帰納法で示す。  $y = 0$  なら  $x < x+1$  よりよい。  $y+1$  について、

$$\begin{aligned} g_0^{y+2}(x) &= g_0(g_0^{y+1}(x)) > g_0(x) & (\because \text{帰納法の仮定と (a)0}) \\ &> g_0(x) = x+1 > x \end{aligned}$$

(c)0  $x$  を任意にとる。このとき (b)0 より  $g_0(x) < g_0^{x+1}(g_0(x))$  なので、(a)0 から以下が成り立つ。

$$g_1(x) = g_0^{x+2}(x) = g_0(g_0^{x+1}(x)) > g_0(x)$$

次に  $(a)m, (b)m, (c)m$  が成立すると仮定して  $m+1$  でそれぞれが成立することを見る。

$(a)m+1$  まず  $x < y$  を固定しておく。定義から  $g_{m+1}(y) = g_m^{y+2}(y) = g_m(g_m^{y+1}(y))$  であり、同様に  $g_{m+1}(x) = g_m(g_m^{x+1}(x))$  ゆえ、 $g_m^{x+1}(x) < g_m^{y+1}(y)$  を示せば  $(a)m$  から帰結される。そのためには次の二つを示せば十分。

1.  $\forall i[g_m^{i+1}(x) < g_m^{i+1}(y)]$
2.  $\forall z(\forall w < z[g_m^{w+1}(y) < g_m^{z+1}(y)])$

実際、1 から  $g_m^{x+1}(x) < g_m^{x+1}(y)$  が分かり、2 から  $g_m^{x+1}(y) < g_m^{y+1}(y)$  が従う。まず 1 を  $i$  に関する帰納法で示す。  $i = 0$  は  $(a)m$  なのでよい。  $i+1$  の場合も、帰納法の仮定と  $(a)m$  より

$$g_m^{i+2}(x) = g_m(g_m^{i+1}(x)) < g_m(g_m^{i+1}(y)) = g_m^{i+2}(y)$$

2 を  $z$  に関する帰納法で示す。  $z = 0$  は自明。  $z = 1$  とする。 このとき  $(a)m$  より  $g_m^1(y) = g_m(y) < g_m^2(y)$ 。

$1 \leq z$  で成立するとして  $z+1$  での成立をみる。 まず  $w = 0$  のとき。  $(b)m$  より  $y < g_m^{z+1}(y)$  なので  $(a)m$  から

$$g_m(y) < g_m(g_m^{z+1}(y)) = g_m^{z+2}(y)$$

次に  $w$  は  $0 < w < z+1$  だとする。  $w = w' + 1$  なる  $w' \geq 0$  がただ一つある。  $w' < z$  ゆえ、帰納法の仮定から  $g_m^{w'+1}(y) < g_m^{z+1}(y)$  である。 よって  $(a)m$  と合わせて

$$g_m^{w+1}(y) = g_m(g_m^{w'+1}(y)) < g_m(g_m^{z+1}(y)) = g_m^{z+2}(y)$$

を得る。

$(b)m+1$  まず  $x$  を固定しておく。  $y$  に関する帰納法で示す。  $y = 0$  なら  $(b)m$  より

$$x < g_m^{x+2}(x) = g_{m+1}(x) = g_{m+1}^1(x)$$

$y$  でよいとし、  $y+1$  については以下。

$$\begin{aligned} x &< g_m(x) && (\because (b)m) \\ &< g_m(g_{m+1}^{y+1}(x)) && (\because \text{帰納法の仮定から } x < g_{m+1}^{y+1}(x), \text{ および } (a)m) \\ &< g_{m+1}(g_{m+1}^{y+1}(x)) && (\because (c)m) \\ &= g_{m+1}^{y+2}(x) \end{aligned}$$

$(c)m+1$   $x$  を固定しておく。 先ほど示した  $(b)m+1$  から  $x < g_{m+1}^{x+1}(x)$  であり、  $(a)m+1$  によって

$$g_{m+1}(x) < g_{m+1}(g_{m+1}^{x+1}(x)) = g_{m+1}^{x+2}(x) = g_{m+2}(x)$$

以上ですべての帰納法が完了した。

$n < m$  ならば  $\text{PRA} \vdash \forall x(g_n(x) < g_m(x))$  を示す。  $n$  を個定し、

$$\forall m > n[\text{PRA} \vdash \forall x(g_n(x) < g_m(x))]$$

を  $m$  に関する帰納法で示す。  $m = n+1$  なら  $(c)$  そのものである。  $m+1$  についても  $(c)$  と帰納法の仮定から即座に成り立つ。  $\square$

## 参考文献

- [1] 田中 一之, “数学基礎論序説 数の体系への論理的アプローチ”, 裳華房, 2019.
- [2] S. G. Simpson, Subsystems of Second Order Arithmetic, Perspectives in Mathematical Logic. Springer-Verlag, 1999.